

熱帯原生林の共生社会論

——ボルネオの原生林を守る民族間コミュニケーション——

金 沢 謙 太 郎 分 藤 大 翼 小 泉 都 佐 久 間 香 子

キーワード：文化人類学 民族学 熱帯原生林 狩猟採集民 農耕民

商業伐採が進行するマレーシアにおいて、サラワク州（ボルネオ島）のバラム河上流域には5万 ha 強の原生的森林が残っている。その森に暮らし、森を守ってきたのは狩猟採集民のプナン人たちである。彼らの生活は、周囲の農耕民との関係によって支えられており、商業伐採に対峙しながら生活していく上でも、良好な民族間関係は不可欠の要素となっている。では、両者の間でどのようなコミュニケーションがなされているのか。本稿は熱帯原生林を守る狩猟採集民と農耕民の社会的関係性について、文化、歴史、政治の諸側面から考察する¹。

1. はじめに

熱帯雨林地域の狩猟採集民がどのように存続してきたのかという問いに対して、これまで農耕民との共生の関係性に着目した議論が重ねられてきた。ここでいう共生とは、異なる生き方をしている人間集団が互いに関係し合いながら生きている現象を指す。

ピーターソンは、フィリピン、ルソン島の狩猟採集民ネグリトと低地農耕民の間に見られる食糧の交換システムにおいて、ネグリトは摂取する炭水化物の70～100パーセントを農耕民に、そして農耕民はタンパク質の30～50パーセントかそれ以上をネグリトに依存していることを明らかにした（Peterson, 1978）。その後、狩猟採集民と農耕民の社会的関係性をめぐる議論は熱帯乾燥地域にも広がり、人類学上の論争へと発展する。「カラハリ論争」では、アフリカの狩猟採集民、サン（ブッシュマン）はその隣人たるバンツ系の人びとの牧畜や農耕に依存して生活しているとの主張が出された（Wilmsen, 1989）。「ワイルドヤム・クエスチョン」では、熱帯雨林にはヤムイモなどがあるものの年間を通じて十分な炭水化物源が存在するわけではなく、狩猟採集民は農耕民の栽培する農作物に頼らずには熱帯雨林に進出できなかったという仮説が提起された（Headland, 1987; Bailey et al, 1989）。また、熱帯の狩猟採集民社会は複雑な加工や貯蔵の技術をもたず、ものや土地に対する所有概念を発達させていないという経験則が見出された（Woodburn, 1982）。定住化政策や現金経済の浸透に伴い、農耕民へ

の依存度が高まるにつれ、搾取的関係に陥り社会的ストレスにさらされている狩猟採集移民もいる (Eder, 1987)。また、一般的に狩猟採集民は農耕民から「庇護すべき対象」あるいは「労働力」とみなされており、両者の社会的関係性は対等ではないということが強調されてきた。

マレーシア、サラワクのバラム河上流域はウルバラム (Ulu Baram) と呼ばれる。ウルは上流、奥地を意味する。ウルバラムのスルンゴ川 (Selungo) 周辺は、国立公園などの自然保護区以外で唯一まとまった原生林が残っている地域である。その他のサラワクの原生林はほぼすべて商業伐採し尽くされてきた。この森に住み、森を守ってきたのはプナン人 (Penan) である。2011 年にこの地のプナン人は「平和の森—プナン人からの意見と行動計画、すべての人びとの利益のために—」という構想を発表した (Penan, 2011)。原生林とともに自分たちの生活環境を守っていききたいというのがプナン人の望みである。

ウルバラムには、この地域を中心に居住する農耕民、クラビット人 (Kelabit) の村々が点在する。ボルネオの様々な地域で、農耕民がプナン人を見下したような発言をしたり、プナン人が農耕民に遠慮した態度をとったりする様子を筆者らは見てきた。しかし、「平和の森」が構想されている地域のプナン人の振舞いは、他の地域のプナン人のそれとは対照的であった。プナン人とクラビット人は気の置けない間柄という感じで実にのびのびと話しをしている。そこでは、単に食糧や労働力の交換という即時的な利益を得るための関係というモデルでは捉えきれない民族間のコミュニケーションが行われていた。

商業伐採に対峙しながら生活していくためには、開発アクターによる分断に対抗しなければならない。ウルバラムにおいて原生林が守られてきた要因として、プナン人とクラビット人の良好な関係性が重要な役割を果たしているのではないか。隣接集落を含む地域全体で原生林を守ってきたのだとすれば、2 つの民族は日常的にどのように意思疎通をはかり、良好な関係性を築いてきたのか。

本稿では、狩猟採集民と農耕民の共生の社会的関係性について、市川光雄の提唱する文化、歴史、政治の3つの視角から検討していく。市川によれば、熱帯雨林という自然とそこに住む人びとの関係の総体を理解するには、「3つの生態学」を統合する視角が必要である (市川, 2001; 2003)。一つ目は、狩猟採集民や農耕民がどのように森に依存し、また森を利用しているかという文化生態学視角である。二つ目は、人と森あるいは森の民同士の関係を歴史的に考察する歴史生態学的視角である。三つ目は、環境資源へのアクセスをめぐる競合や対立に焦点を当てた政治生態学的視角である。

2. 調査対象地域と調査方法

2013年9月、2014年9月、2015年11-12月、2016年3月に、ウルバラムにおいて広域踏査を行うとともに、ロング・クパン村 (Long Kepang) とロング・ララン村 (Long Lellang) で集中的な参与観察や聞きとり、映像記録を行った (図1)²。ロング・クパン村は狩猟採集を主な生業とするプナン人の集落、ロング・ララン村は農耕を主な生

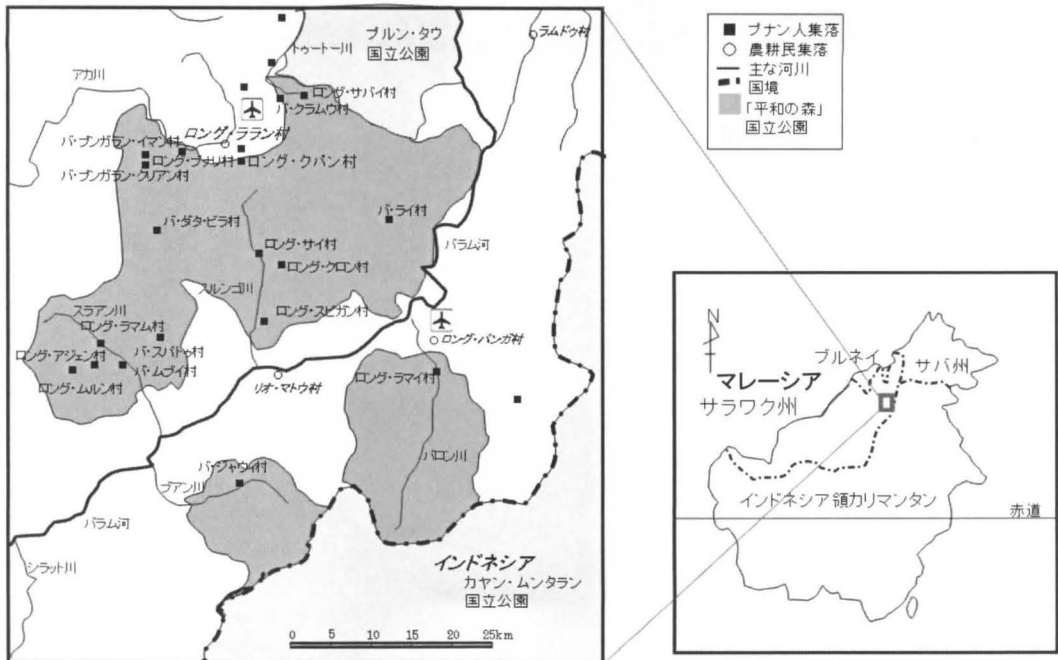


図1. 調査対象地域

業とするクラビット人の集落である。村長などを通じてそれぞれの村の家庭に居候させてもらい、調査助手や通訳などは伴わずに、普段の生活にできるだけ近い状態を観察した。聞きとりについては、あらかじめ用意した質問とともに被調査者の回答に応じて、質問を追加したり、順序を変更したりしながら進める半構造化インタビュー (semi-structured interview) を行った。また、プナン人とクラビット人のコミュニケーションを映像によって記録することで、精度の高いデータを収集した。

調査地までのアクセスについては、海岸部の町、ミリから週3便出ているロング・ララン行きの小型プロペラ飛行機を利用した。所要時間は約1時間である。陸路で向かうとほぼ1日かかりであるから、航空路の利便性は非常に高い。ロング・ラランから周辺の各プナン人集落までは、徒歩で数時間から1日程度を要する距離にある。上述の「平和の森」構想に参加しているのは18のプナン人集落である。ロング・ララム村 (Long Lamam)、ロング・アジェン村 (Long Ajeng)、ロング・ムルン村 (Long Murung)、バ・ムブイ村 (Ba Mubui)、バ・スパトゥ村 (Ba Sepateu)、バ・ダタ・ビラ村 (Ba Data Bila)、バ・プンガラン・イマン村 (Ba Pengaran Iman)、バ・プンガラン・クリアン村 (Ba Pengaran Kelian)、ロング・ブンナリ村 (Long Benali)、ロング・クパン村、ロング・サイ村 (Long Sait)、ロング・クロン村 (Long Kerong)、ロング・スピガン村 (Long Sepigen)、ロング・ラマイ村 (Long Lamai)、バ・ジャウイ村 (Ba Jawi)、バ・ライ村 (Ba Lai)、ロング・サバイ村 (Long Sabai)、ロング・クラムウ村 (Long Kerameu) である。これらの集落に合わせておよそ400家族、1,800人が暮らしている。

3. 文化

3-1. プナン人の生業

プナン人の集落であるロング・クバンはロング・ラランから徒歩で2時間ほどの距離にある。2015年11月の時点では、全7世帯で構成されていた。村長の証言によれば、以前はロング・クバンの人口や世帯数はもっと多かったという。プナン人の伝統的な慣習においては、死者が出ると、埋葬後に他の者たちは新たな場所に引っ越した。同村から一部のメンバーがこの慣習に従ってロング・サバイ村やロング・サイ村、ロング・ブナリ村へと分かれ、さらに、ロング・サイ村からロング・スピガン村へと分かれた。

彼らの狩猟にはプナン語で「クルプ (*keleput*)」と呼ばれる吹矢が用いられる。以前は女性たちも吹矢をもって狩りに出ていたが、今は一部の女性が槍を使って狩りをするのみで、男性が吹矢猟の担い手である。堅い材質の木材から作られる吹矢は、長いものでは2メートルを超える。吹矢の矢は、タケやヤシから作る。大・中型の動物を射る際にはタジウム (*tajem*) という矢毒が用いられる。タジウムはマレー語でイポ (*Ipoh*) というクワ科の樹木およびこれから得る矢毒 (樹液) を指す言葉である。村の周りにはこの矢毒を採取するタジウムの木が複数あり、表皮を傷つけて白い樹液を抽出する。矢毒を受けた動物は、逃げたとしても数百メートル以内で倒れる。森では、ヴィホウ (*viheu*) という跳ねわなも使う。動物の通り道に木の皮で作った紐で仕掛ける。動物が足を突っ込むと紐が締め、動物が吊り上げられる。投げ縄が締まる原理と木の枝の弾性を利用する。仕掛けが見えないように葉などで覆い隠しておく。吹矢猟も跳ねわな猟も、使う道具はすべて森から調達できるため、道具類を購入する必要はない。

彼らが主食とするのは野生のサゴヤシから採取されるデンブンである。ヤシの間には新芽や果実が食べられるものも多い。彼らはサゴヤシのありかを把握しており、27種もの食用ヤシを認識している者もいる。新芽は外側を剥いて生のまま食べられるが、デンブンの採取には何種類もの道具や作業台を使う作業を要する。デンブンを採取するためには、まずサゴヤシ数本を斧で切り倒し、それぞれの幹を長さ1m前後に切り分ける。山刀でトゲのついた表皮を削り取る。山刀と棒2本を使って、その幹を縦方向に真っ二つに割る。次に、鍬に似た道具で幹の中につまっているサゴヤシの髓をかき出す。続いて、女たちが川べりで直径10cmほどの木を敷き詰めて2m四方の土台を組む。その上に、籐の敷物を敷き、かき出した髓を盛る。川の水をかけながら、裸足で軽くステップを踏むようにして髓を押し洗いする。下に敷いてあるシートにデンブンが沈殿する。下にたまったデンブンを大きな団子状にまとめる。その塊を4~5時間遠火にかけて、ゆっくりと水分を飛ばす。その後、籐の敷物の上で粉々に砕き、粉の状態に保存する。調理の際は、少量の水と混ぜてからたっぷり熱湯を注いで攪拌すると、ナオ (*nao*) と呼ばれるプナン人の主食となる。

ロング・クパン村では、サゴ・デンプンのほか、焼畑のコメも食べている。焼畑耕作を始めたのはプナン人集落のなかでも早く、60～70年前という。ただし、世帯当たり1エーカー前後の小規模な焼畑である。この地域の焼畑稲作では、おおむね6月以降に焼畑予定地を伐開する。まず下草や小径木が切り払われ、追って大径木の伐採が行なわれる。8月初めの火入れまで天日乾燥の期間をおく。火入れから数日以内、灰が冷えるか冷えないかのうちに陸稲の播種が始まる。播種の際には、掘棒を使ってまず穴をあけ、そこに種を播いていく。陸稲の芽が出てから収穫まで半年近くを要する。その間、必要に応じて除草作業を行なう。稲刈りはナイフなどを使って穂先だけを刈り取っていく。集めた穂は村で天日乾燥させ、その後、足で踏みながら、粃を穂から離す。収穫された陸稲は、粃のまま貯蔵され、必要に応じて適宜、粃すりを行なう。

サゴとコメのどちらを好むかといえば、年配層はサゴの食事を好み、若年層はコメの食事を好む傾向にある。子どもたちは学校や寄宿舎でコメ食に親しんでいる。また、肉中心の食事ではサゴ、魚中心の食事ではコメという組み合わせで食べる家庭もある。

現金収入は月に50リンギ(1,300円ほど)ほどの世帯が多い。獣肉や魚が多く獲れたときはロング・ララン村に売りに行く。イノシシ肉は1キロ10リンギ(約260円)が相場である。シカ肉はクラビット人が好まないため、1キロ5リンギ(約130円)前後で売買されている。山菜や野菜を売りに行くこともある。また、クラビット人からよく頼まれるのは、籐の編み籠や腕輪などのハンディクラフトである。クラビット人が日常使うものもあれば、贈答用の場合もある。プナン人の手先の器用さや根気強さはクラビット人も認めるところである。他に、熱帯原生林で採取される森林資源に沈香という樹脂がある。この地域のプナン人たちは沈香の持続的な採取方法を心得ている(Kanazawa, 2017)。しかし、近年では外部から盗伐団が侵入しているという。

その他、ロング・ララン村での農作業や建築土木の仕事を依頼される場合もある。1日の労賃は20～25リンギ(約520～650円)前後で、個人間の交渉によって決まる。

3-2. クラビット人の生業

クラビット人が大半を占めるロング・ララン村ができたのは、1976年から1977年にかけてである。徒歩で2時間ほどの距離にあるロング・ダティ(Long Dati)からの移住者によって構成されていた。2015年11月の調査時には、家屋をもつ43世帯のうち在宅だったのは8世帯のみだった。学校が休暇期間だったため、ミリなどに出かけている世帯もあった。少なくとも17世帯は他所に生活の本拠を置き、空き家になっている。ロング・ダティには平坦な土地が少なかったという。1970年代初めには2年間ロング・サイ村に移住していた時期がある。それ以前は、バラム河下流のトゥト河(Tutuh)流域を転々としていた。

同村の主な生業は、水田と焼畑の稲作である。ボルネオ島では、奥地の山間部にもわずかだが平坦な土地が見られる。この地域での水稻耕作は1920年代終わりに華人がクラビット人に灌漑水稻耕作の方法を伝えたのが始まりとされる(Hose, 1985: 189)。

ただし、自然の地形を利用した湿地田稲作は古くから行われていたという見方もある (Janowski, 2003, 29)。標高が高い山間地は日射量が多いうえに、気温が上がらず、年間通じて一定の雨量がある。さらに、ロング・ララン村では周囲の原生林から流れ出る清冽な水によって灌漑用水をまかなうことができる。聞きとりを行った 8 世帯のうち、4 世帯が水田を営み、その耕作面積は平均 3.75 エーカーであった。一方、傾斜がある土地では焼畑耕作が行われており、別の 4 世帯が焼畑を行っており、その耕作面積は平均 2.75 エーカーである。収穫した米は自家消費や親族などに配る割合が多いが、販売する場合はガンタン (*gantang*; 約 3.1 キロ) という単位で 30 リンギ (約 780 円) である。クラビット人が作るコメ「ブラ・アダン (*bera adan*)」は「バリオ米 (*Bario rice*)」と呼ばれ、高級米の代名詞となるほど評判が高い。

村人たちのなかには飛行場で雇用されている者もいる。ミリからの定期便は週 3 便だが、月に 1 回のフライング・ドクター (定期診療のためにヘリコプターで定期診療にやってくる医師) や予定外のフライトがある。毎朝 6 時から夜 10 時まで村人が持ち回りで飛行場に待機し、管理にあたっている。10 時間程度の勤務で 60 リンギ (約 1,600 円) の日給が支給されている。飛行場での雇用はロング・ララン村の住人に限られている。ただし、政府や航空会社に飛行場の維持拡充を陳情する際などは、近隣のプナン人集落の人口も同じコミュニティの構成員として計上している。その他、コーヒーを植栽し、農園経営を始めている世帯がある。

3-3. 森林産物の売買

ロング・ララン村には近隣のプナン人が獣肉や山菜などを売りに来る。籐製の背負い籠で数キロの塊肉などが運び込まれる。プナン人はクラビット人宅に上がって、階段などに腰をかける。長椅子などに相席しながら、話をする場合もある。以下は、イノシシ肉が売買された際の会話である。

クラビット人: *Koh pakai inau iteu rik? Pakai asou?*

プナン人: *Be. Pakai maten awak.*

クラビット人: *Pina' keto babui tong tana kei?*

プナン人: *Puun. Kiah, tapi be makat pina'*

クラビット人: どうやってこれを獲った? 犬を使ったのか?

プナン人: いや、使ったのは自分の目だけだ。

クラビット人: イノシシはまだたくさんいるのか?

プナン人: ああ、いるよ。でもそんなに多くない。

クラビット人が台秤で重さを計測した後、その場で代金を支払う。その際、クラビット人はプナン人の労をねぎらうのに対して、プナン人は特にお礼も言わず、当然と

いう態度で代金を受け取る。両者の会話では専らプナン語が使用されている。プナン人は総じて農耕民と比べて小柄であるが、体力や俊敏さの点で秀でているとクラビット人も認めている。

3-4. 異民族間結婚

ロング・ララン村においては、聞き取りを行った全世帯にプナン人を含む異民族間結婚 (inter-ethnic marriage) が見られることが明らかになった。図2は同村の親族・婚姻関係図である。

世帯1は夫がプナン人男性(父プナン人、母クラビット人)で妻はクニャ人(Kenyah)に近いモレ人(Morek)という集団出身の女性である。ロング・ラマ(Long Lama)の中学校で互いに知り合ったという。5人の子どもがいる。このプナン人男性の父親は近隣のプナン人集落出身、母親はロング・ララン村のクラビット人であった。プナン人男性とクラビット人女性という組み合わせの初めての夫婦といわれている。そのクラビット人女性は半身不随であり、プナン人男性は結婚前からハンデをもつその女性を親身に世話していたという。そして、その様子を見ていた村の人びとも両者が一緒になることを自然に認めるようになった。子どもたちについては、末の娘以外は実家を離れている。

世帯2はクラビット人同士の夫婦とその息子世帯が同居する3世代家族である。息子の妻はプナン人村出身のプナン人女性である。息子の異民族間結婚の申し出を両親に認めてもらうまでに1~2年かかったという。周囲の人びとが反対していた両親を説得してくれた。息子夫婦の子どもたちのうち、上の2人はミリに住み、下の3人は同居している。

世帯3もクラビット人同士の夫婦とその息子世帯の同居である。クラビット人の息子はプナン人女性と結婚した。村人の話では、クラビット人の間でプナン人と婚姻関係を結んだ最初のケースとされる。1960年代、クラビット人たちはロング・サイ村周辺で焼畑を営んでおり、そこで2人は知り合った。クラビット人とプナン人との結婚について、当初男性の祖父と母親は強く反対したという。村中を巻き込んだ議論になったが、最後は村の人びとが結婚に反対していた親族を説得した。息子夫婦の子どもたちのうち、4人が村に残っている。

世帯4もクラビット人同士の夫婦とその息子世帯が同居する3世代家族である。息子の妻はクニャ人女性で、両者の結婚はロング・サイ村の小学校の校長が仲介した。クニャ人には男性側から女性側に婚資を届ける習慣があり、花嫁の家族にビーズ、布のほか、ゴング(gong)と呼ばれる打楽器などを贈った。息子夫婦の子どもたちはいずれも実家を離れている。

世帯5はクニャ人男性とクラビット人女性の夫婦世帯。夫は空港の管制官の仕事をしていたが、現在は退職。妻とはマルディの空港で知り合ったという。真ん中の息子は同居しているが、他の子どもたちは実家を離れて暮らしている。

世帯6は夫がクラビット人、妻がルン・バワン人（Lun bawang）の夫婦。元教師と教え子だったという。異民族間婚に困難はなかったが、婚資として12頭の水牛が必要だったという。結婚式の客人には宿泊と計5回の食事を振る舞った。子どもたちのうち、末の娘以外は実家から離れている。

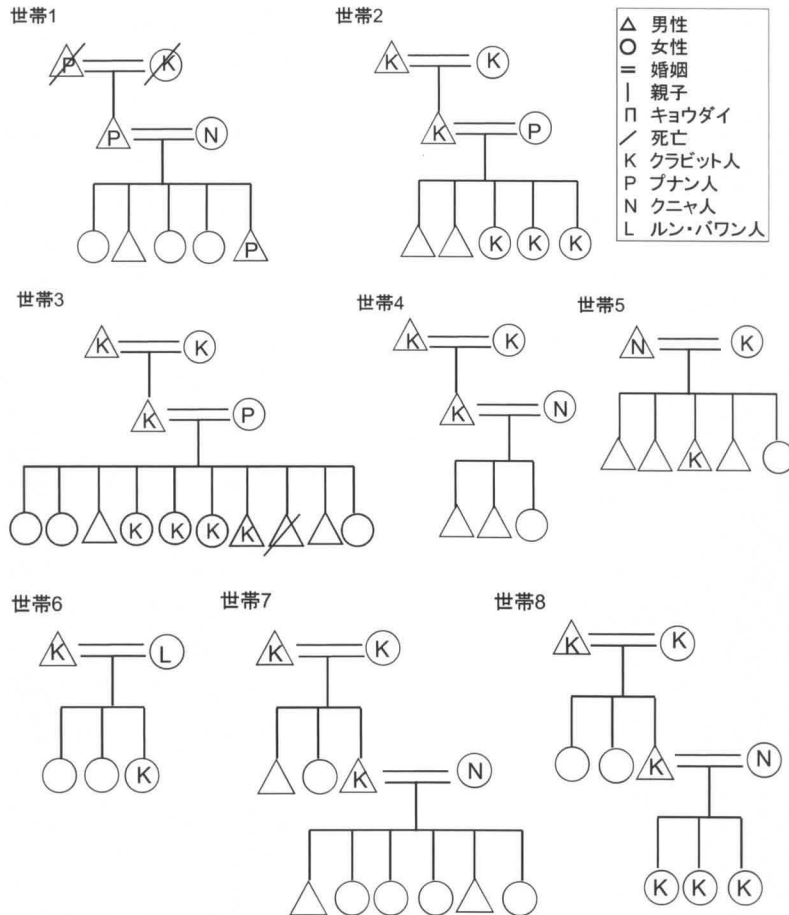


図2. ロング・ラン村の親族・婚姻関係

世帯7はクラビット人同士の夫婦とその息子世帯が同居する3世代家族である。息子の妻はクニャ人女性で、息子は元教師、妻は元助産師であった。次男夫婦の子どもたちはみな独立して村を離れている。

世帯8もクラビット人同士の夫婦とその息子世帯が同居する3世代家族である。息子の妻はクニャ人女性である。息子夫婦の子どもたちは全員同居している。

ロング・ラン村では、インタビューを行ったすべての世帯で異なる民族間の婚姻関係が確認され、プナン人男性とクラビット人女性との婚姻関係もあることがわかった。一方、プナン人集落では、バ・プンガラシ・クリアン村にクラビット人とプナン人の夫婦1世帯が確認された。ちなみに、周囲にプナン人が多いムルの農耕民の集落（ブラワン人 85 世帯）やロング・バンガ村（サバン人/クニャ人）などサラワク州の

他の地域では、農耕民の村にプナン人と農耕民の夫婦が暮らしている事例を筆者らは知らない。ロング・ララン村では、文字通りの共生が実践されている。ただし、前述のとおり、プナン人とクラビット人との結婚をクラビット人側の肉親が簡単に認めている例はない。狩猟採集民と農耕民が親戚関係になるというハードルは現在も高い。聞きとりの中には、親の反対によって破談になったケースもある。しかし、そうした困難を周囲の人びとを巻き込んで時間をかけて克服してきた例があることも事実である。ウルバラムのプナン人とクラビット人の間では、親族・婚姻関係を通じて、より対等な関係性を志向する共生が実践されてきた。

4. 歴史

4-1. 森林産物交易

ロング・クパンのプナン人によると、調査地域は元々狩猟採集民であるプナン人の居住域であったが、周辺地域から農耕民（カヤン人、クニヤ人、クラビット人など）が移り住んできた。プナン人と農耕民は、食物や土地など生存に必要な資源を利用する上で競合せず、互いに攻撃し合うことはなかった。

しかしながら、プナン人と農耕民との接触・交流がなかったわけではない。採集民であるプナン人と農耕民との間でタム (*tamu*) と呼ばれる物々交換の市がもたれていた。これは、プナン人と顔見知りのごく限定された近隣の農耕民集団との間で行われた。プナン人はタムの場に、籐やダマール樹脂、リュウノウなどの森林産物を持参した。持参するものは、場所や時期、時代によって変わるが、籐で編んだマットやバスケット、吹矢のほか、動物の胆石などがある。これに対して、プナン人は農耕民から森からは得られない金属製の鍋やヤカン、衣類、塩、タバコ、ビーズなどの生活物資や嗜好品を手に入れることができた。なお、タムに食糧が持ち込まれることはなく、プナン人はコメやトウモロコシ、キャッサバなどを求めることもなかった (Brosius 1991: 136)。

イギリス人探検家、ジェームス・ブルック (James Brooke) がサラワクの「ラージャー (王)」として支配権を確立したのは、1841年のことであった。サラワクは以後、日本軍の侵略によって占領された一時期を除いて、100年余りにわたってブルック家の支配下に入る。ブルック家はタムを監督するようになった。1868年に王位に就いたチャールズ・ブルックの時代にタムは定期的に行われるようになった (Langub 1984: 12)。タムの場にプナン人は自由に参加することができたが、農耕民はプナン人が顔を知る者に限られた。政府役人は、プナン人が持参してきた森林産物の重さを量り、値段を推定した。県長や医務局、農業局、その他関係機関の担当者が現地に出た。政府は採集民と農耕民の利害を調整し、合意形成を促す監督者の役目を果たしていた。数日間行なわれるタムはプナン人にとって自分たちの問題を政府に伝える唯一の機会であった。当時のプナン人は伝統的な遊動あるいは半遊動の生活様式を営みつつ、自

らの意思で森林産物を採集し、販売することができた。毎回タムが終わると、参加集団は参加したすべての人びとを歓待するために踊りを披露した。タムは、自然と社会に密着した交換の場であると同時に、会合の場であり、文化祝祭の場であった。行政側もタムに出向くことで奥地の情報を得ることができた。プナン人は監督者の同席を歓迎していたという (Langub 1984: 14)。

当時、タムの開催予定日と場所については政府が決め、農耕民とプナン人に伝えた。農耕民には村長へ手紙を出すなど比較的簡単に伝達できた。一方、プナン人に対する伝達方法は工夫を要した。具体的には、トゥブクウ (*tebukeu*) と呼ばれる1本の籐に結び目を作って開催日までの日数を伝えた。結び目の数が開催日までの日数を意味していた。開催日までの時間、プナン人は森で森林産物を集め、籐のカゴや敷物を編む。農耕民はプナン人と交換する日用品などを町へ出かけて買い揃えておく。タムは1970年代の森林の商業伐採が始まるころまで続いた。年輩のプナン人たちは今でもタムに参加したことを懐かしく語ることがある。

4-2. 教会と学校

ボルネオ島では、19世紀半ばからカトリックやプロテスタントの宣教師が布教活動を始めている。その活動によって、内陸部の先住民の多くがキリスト教徒となった。ウルバラムのクラビット人もプナン人もともにプロテスタント系のキリスト教を信仰している。クラビット人はプナン人より早く1950年代にキリスト教をとり入れた。その後、森で暮らすプナン人への教化にはクラビット人の辛抱強い働きかけがあった。現在でもクラビット人集落でのキリスト教関連の行事にプナン人が招待されることがある。

ボルネオ先住民のうちプナン人以外の農耕社会では、かつて首狩りの風習が見られた。首狩りとは文字通り、相手の首をとる目的で戦闘する行為である。クラビット人の村には、トゥングル・イラン (*tungul ilan*) と呼ばれる首狩りの刀が残っている。首狩りは一般に異なるエスニック集団間で行われ、インドネシア側から侵入してくる敵に対しても行われたという。政府による禁止やキリスト教化によって、この風習は廃れた。また、昔はクラビット人はブラ (*burak*) という米から作った酒を飲んでいて、ときには朝まで飲むほど大酒飲みだったが、キリスト教信仰により飲酒を慎む人が増えた。年配のクラビットの女性は手足に刺青 (タトゥー) を入れている人が多い。刺青を入れる勇気がない女に男はプロポーズしなかったといわれている。しかし、刺青の習慣も若い世代の女性には引き継がれていない。そんななかで、クラビット人社会に今も残る特有の習慣がある。それは子どもが生まれたときと孫が生まれたときに、名前を変える習慣である。その都度、イラウ・マカア・ンガダン (*irau makaa ngadan*) と呼ばれる盛大な宴会が催される。ロング・ラランの村長に孫が生まれたときには、水牛1頭の他、ブタやニワトリなどが昼夜に振る舞われた。これには顔見知りのプナン人たちも招かれたという。

第二次世界大戦中、日本軍の侵攻を食い止めるべく、イギリス軍のパラシュート部隊がクラビット人集落のバリオ (Bario) に駐留した。それがきっかけとなり、1946年にバリオに小学校が開設された。1960年代、隣国のインドネシアはマレーシアに対して、コンフロンタシ (Konfrontasi) という対決政策をとった。インドネシアとの国境に近いウルバラムには、マレーシア軍に加えて、イギリス部隊が配置された。そのため、バリオをはじめとするボルネオの奥地には、英語やイギリス文化が浸透し、クラビット人の進学率や海外留学者数が増えていくこととなった。クラビット人はサラワクで数千人規模の少数民族でありながら、法律家や医師、政治家など国内外で活躍する数多くの人物が輩出している。

ロング・ララン村にも小学校が設置されている。教員は州政府から派遣され、校舎はクラビット人によって管理されている。クラビット人生徒は少数で、大半の生徒は寄宿舎に入っているプナン人である。プナン人生徒は近隣の村々から100人以上集まっている。クラビット人生徒とプナン人生徒は机を並べて学んでいる。彼らは卒業後も互いに友人を意味するスビラ (sebila) と呼び合っている。

4-3. 森林開発制度

サラワク先住民の各コミュニティはアダット (adat) と呼ばれる伝統的な慣習法をもつ。アダットは、秩序や社会関係を規定し維持する一連の規則であり、一般に口承で伝えられてきた。成人、結婚、葬式といった人生の通過儀礼や古いや精霊・祖先崇拜、さらには土地や森林資源の利用などもその対象である。

ブルック家の支配下においても先住民の慣習的土地保有権は尊重されてきた。1958年に施行された現行の土地法にも先住慣習地という土地区分が規定されている。しかし、問題となるのは、それまで農業を行わず、定住地も墓地をもたないプナン人の生活様式である。ウルバラムで最も早く定住した村でさえ、それが土地法成立後であったため、一般的な解釈では先住慣習権は認められていない。現在までにウルバラムのプナン人たちは自らの慣習的権利を求めて3件の裁判に訴えている。1つ目は原生林地帯のスルンゴ川流域であり、2つ目はスルンゴ川の南東に位置するロング・ラマイ村であり、3つ目はスルンゴ川の南に位置するバ・ジャウィ村である。

森林に関する開発制度はブルック家の植民地期に準備された。1930年と1934年にはそれぞれ保存林、保護林という森林区分が創設された。サラワクの森林区分では、保護林は保存林とともに永久林 (Permanent Forest) と呼ばれている。永久林とはその名称から受ける一般的な印象とは異なり、輸出用の木材生産の要求に応えるために設定された区域のことをいう。林木の種類や樹幹の直径に条件をつけて選択的に伐採する択伐方式により、恒常的に木材が産出されうる林地である。永久林は今日にいたるまで拡大されてきた。

1957年に半島部のマレーシアがイギリスから独立し、次いで1963年にサバ、サラワクの2州がマレーシア連邦に加盟した。その際の条件として、石油・天然ガスから

の税収入は、連邦政府によって徴収・管理されることとなった。サラワク州のミリヤビントゥルなどの沿岸部は石油・天然ガスに恵まれているが、それらの採掘に伴うサラワク州のロイヤルティは 5%に抑えられている。一方で、サラワク、サバの各州政府は、森林資源の開発・管理にかんする権限を有している。木材の輸出税を含む土地と関連したロイヤルティにかんしては基本的に州政府の管轄である。ここに、サラワクが石油資源という経済的富の源をもちながら、森林資源に依存度を高めざるをえない遠因をみることができる。実際、1990年代には輸出税総額のうち木材関連の割合がおよそ5割を占めるまでになった。

5. 政治

5-1. 伐採をめぐる利権構造

森林はたとえ州有であっても、州が直接に森林開発を行なうわけではない。森林開発を行なう場合、州政府は民間企業に一定区画の森林の伐採権 (concession) を貸与して開発をまかせ、その出材量に応じて、ロイヤルティや各種賦課金などを徴収する方式をとっている。サラワクから伐り出された木材は、林道 (木材運搬用の道路) を通じて製材工場へと運ばれ、主に日本へ輸出されてきた。

マレーシアでは伐採権所有者の大半はマレー系の政治家やその親戚が占めている。サラワク州でも同様に、1981年から2014年までの33年間、州首相の座にあったアブドゥール・タイブ・マフムド (Abdul Taib Mahmud) の一族が筆頭にくる。前首相は家族や友人ら身内を中核としたパトロン-クライアント関係のネットワークをつくって、クライアントから政治的、金銭的支援を受ける見返りに、治安警察や天然資源、伐採権、許認可に伴う権限を用いてクライアントの便宜を図ってきた (Dauvergne, 1997: 166-167)。その結果、サラワクの富豪の多くは、木材伐採権をもつ政治家と華人を中心とした木材企業の関係者となっている。

加えて、木材輸出に絡む汚職や不法資金の流れが詳らかになったのは最近のことである (Straumann, 2014)。タイブ一族は熱帯材輸出の独占体制を築き、日本への木材輸出の許認可を与えた。その代わりに、日本の木材輸入に関係する企業は香港のペーパー・カンパニーにリベートを支払ってきた。リベート資金はペーパー・カンパニーから投資企業に振替えられて、北米の不動産購入の融資に充てられた。投資企業はタイブ一族によって秘密裏に管理されていた。

2014年にタイブは突如首相を辞任した。理由は明らかになっていないが、上記の不法資金の流れが明らかになったことも一因とされる。新首相のアデナン・サテム (Adenan Satem) は、就任直後にサムリン社 (Samling) を含むサラワク州の木材大手6社に対し警告を発した。許可地域外の違法伐採に関与しているとの理由からである。また、違法伐採が改善されるまで伐採ライセンスの新規発行の停止も発表した。サムリン社はサラワクで最大規模の160万haの伐採権を保有する木材企業である。プナン

人たちが提唱する「平和の森」における森林伐採権も同社が握っている。

5-2. 伐採反対のネットワーク

1990年代からサムリン社はウルバラムでたびたび商業伐採を仕掛けてきた。しかし、その都度、プナン人たちは団結して林道封鎖などによって森を守ってきた（金沢、2015）。

サラワクのさまざまな NGO（民間団体）がプナン人の闘いを支援してきた。サハバ・アラム・マレーシア（Sahabat Alam Malaysia）は頭文字をとって SAM（サム）と呼ばれる。SAM は国際 NGO、地球の友（Friends of the Earth; FoE）のネットワークの一角である。バラム河沿いの町マルディ（Marudi）にあるオフィスには、プナン人たちがしばしば相談に訪れている。1993年にミリではブリマス（Borneo Resources Institute; BRIMAS）が発足した。ブリマスはウルバラムのプナン人らと情報発信や集落の地図作りなどで協働してきた。また、マレーシア先住民族ネットワーク（Jaringan Orang Asal SeMalaysia; JOAS）もウルバラムと外部とをつなぐハブとしての役割を果たしている。セイブ・リバー・ネットワーク（SAVE River Network）はバラム河流域で計画されていたダム建設を政府に撤回させ、ウルバラムを含む流域環境の保護を訴えている。

プナン人との関連で特筆すべき外国人がいる。スイスの芸術家、ブルーノ・マンサーである。彼は1984年からの6年間、バラム河やリンバン河の流域のプナン人とともに暮らし、熱帯雨林と狩猟採集生活の魅力を精緻なスケッチと記録にまとめた。1990年前後、スイスに戻ったマンサーは、ブルーノ・マンサー基金（Bruno Manser Fonds; BMF）を設立するとともに、国際社会に熱帯雨林の危機を訴えるキャンペーンを展開した。彼はプナン人2名とクラビット人1名を連れて、オーストラリア、カナダ、アメリカ、ヨーロッパ各国などを回り、国会議員や国際機関などに問題解決を働きかけた。そのキャンペーンの最後の訪問国は日本だった（金沢、2009; 120）。日本では、熱帯林行動ネットワーク（JATAN）やサラワク・キャンペーン委員会（SCC）、ウータン・森と生活を考える会、FoEジャパンなどがプナン人の運動を支援してきた。

ブルーノ・マンサーはサラワク州政府から「国家の敵」と呼ばれた。2000年5月に彼は再びサラワクに入ったとされるが、以来消息は絶たれたままである。主が亡き後も、BMFはスイスのバーゼルを本拠として活発に活動を続けている。サラワクのニュースを発信したり、内外の政府や企業等への働きかけを行ったりしている。「平和の森」に関連した地図作りやキャンペーンなどをサポートしている。1990年代、ブルーノ・マンサーと世界各国を回ったクラビット人のムタン・ウルド（Mutang Urud）は、その後カナダに亡命した。亡命先で先住民族の権利を支援する活動を行っている。2015年5月にアデナム・サテム首相がイギリスを訪問する機会があった。ムタン・ウルドはウルバラムのプナン人、ビラン・オヨイ（Bilang Oyoi）とともにサラワク首相に「平和の森」の実現を直訴した。BMFなど海外の NGO がこの段取りを整えた。

実のところ、ムタン・ウルド以外のクラビット人の中に「平和の森」構想を表立っ

て支援する人はいない。ロング・ララン村のクラビット人は商業伐採を推進してきた与党の支持者がほとんどを占める。プナン人たちは概ね野党支持である。クラビット人たちは交通路の整備や空港や学校、診療所の維持を望んでいる。ミリとの陸路を結ぶ林道は1990年代に開設されたが、2002年までに使われなくなっていた。2015年に政府が太陽光発電のプロジェクトを導入した際に、再び林道が開通した。さらに、ロング・ララン村では、近隣のプロン・タウ (Pulong Tau) 国立公園の観光開発を望む声もある。同村内の会合はパカルー (Pakareuh) と呼ばれ、3ヶ月に1度開催されている。来客への対応や行事の準備などが話題の中心であり、プナン人の代表者との公式な話し合いなどは行われていない。しかし、政府は林道建設やコミュニティ開発についてプナン人の関与を求めることがある。クラビット人はそのメッセージをプナン人に伝えるが、プナン人はそれを聞き流す。なぜなら、プナン人たちは政府の提案は木材企業の商業伐採と連動していると捉えているからだ。それに対して、クラビット人は「プナン人の問題だから」と必要以上に追及しない。クラビット人に「平和の森」の構想をどう思うかとたずねると、「わからない」と答える人が多いが、「これまでにない新しい仕組みなので少し時間がかかるだろう」という声や「うまくいくことを願っている」という声もある。

5-3. 「平和の森」の行方

2016年に入って、大きな進展があった。2016年2月18日、サラワク州政府は18村のプナン人の代表と「平和の森」構想について協議に応じたのだった (Malaysiakini, 26 Feb 2016)。プナン人コミュニティの代表としてジェームス・ラロ (James Lalo) から正式な要望書が提出された。政府の代表は森林局長のサブアン・アハマド (Sapuan Ahmad) である。政府代表はプナン人たちの提案を歓迎し、今後さらに村人たちと協力して調査検討していきたいと述べた。プナン人たちは政府の前向きな反応を喜ぶとともに、この地域の商業伐採を放棄するよう重ねて要求した。ミリで行われたこの協議にはサラワクのNGO関係者も同席した。この一報を受けて、スイスのBMFは、サラワク州政府が商業伐採に反対するプナン人コミュニティと対話したのは30年間で初めてであり、歴史的な会合であると評価した。

しかし、現地でのこの協議内容が報道されたのは、2ヶ月遅れだった (Borneo Post, 22 Apr 2016)。6月のサラワク州議会選挙を控え、与党に利するタイミングで報道された。記事では、プナン人たちはクラビット人やクニャ人といった隣人の積極的な参加を希望すると伝えられた。そして、州政府は「平和の森」に対して、「タマン・ダマイ・バラム (Taman Damai Baram)」というマレー語 (意味はバラム平和公園) の呼称を使っている。かねてから、プナン人たちは残された原生林が国立公園化され、狩猟採集などの生業ができなくなることを懸念してきた (金沢, 2015: 209-210)。「平和の森」と「タマン・ダマイ・バラム」の目指すところが一致するのか、まだ予断を許さない。

6. まとめ

調査対象地域のプナン人とクラビット人は、それぞれ自律的な生計手段をもち、現在の暮らしには総じて満足している。ともに清らかな環境下で、プナン人は狩猟採集と焼畑耕作を営み、クラビット人は水田と焼畑の耕作を営む。クラビット人は原生林に生きるプナン人の狩猟採集のスキルや手先の器用さを認めている。ロング・ララン村では、他の農耕民集落には見られない異民族間の通婚が行われている。この地ではクラビット人男性とプナン人女性の婚姻だけでなく、プナン人男性とクラビット人女性の婚姻の事例が認められる。両集団の間では、親族・婚姻関係を通じた、より対等な関係性を志向する共生が実践されている。

歴史的には、狩猟採集民と農耕民との間でタムという物々交換の市がもたれていた。現在もプナン人は獣肉や山菜、籐製品などをクラビット人のところへ売りにいく。両者が会話する際にはプナン語、すなわち狩猟採集民の言語が用いられている。ロング・ララン村には飛行場があり、ミリへのアクセスにおいて高い利便性が確保されている。両者ともにプロテスタント系キリスト教を信仰している。ロング・ララン村の小学校では、プナン人の子どもたちが寄宿舎に入って学んでいる。クラビット人とプナン人は幼いころから教会や小学校で同席し、交流や親睦を重ねている。

一方、サラワク州では、これまで持続収量を無視した商業伐採が横行してきた。ウルバラムのプナン人たちは、地元や海外の NGO から支援を受けながら、粘り強く商業伐採への反対運動を続けてきた。2016年に入って、州政府は「平和の森」構想に関してプナン人たちとの協議に応じる姿勢に転じた。

プナン人とクラビット人は政治的な立場に違いはあるものの、互いの意向を尊重しつつ、開発アクターによって分断されることを防いできた。対等な共生の実践には困難が伴うが、彼らは時間をかけてそれらを克服してきた。そうした困難の内実や克服の過程を今後も追究してゆきたい。

注

- ¹ 本研究は JSPS 科研費 JP25300045 の助成を受けている。
- ² 現地調査に際して、マレーシア・サラワク大学 (Univ. Malaysia Sarawak) のボルネオ研究所 (Institute of Borneo Studies) にご尽力いただいた。

参考文献

1. Bailey, R. C., Head, G., Jenike, M., Owen, B., Rechtman, and Zechenter, E., 1989, "Hunting and Gathering in Tropical Rain Forest: Is It Possible?", *American Anthropologist*, Vol.91 No.1:59-82.
2. Brosius, J. P., 1991, "Foraging in Tropical Rain Forests: The Case of the Penan of Sarawak, East Malaysia (Borneo)", *Human Ecology*, Vol.19 No.2: 123-150.
3. Dauvergne, P., 1997, *Shadows in the Forest: Japan and the Politics of Timber in Southeast Asia*, The MIT Press.
4. Eder, J. F., 1987, *On the Road to Tribal Extinction*, The University of California Press.
5. Headland, T. N., 1987, "The Wild Yam Question: How Well Could Independent Hunter-Gathers Live in a Tropical Rain Forest Ecosystem?" *Human Ecology*, Vol.15 No.4: 463-491.

-
6. Hose, C., 1985, *The Field-Book of A Jungle-Wallah*, Oxford University Press.
 7. 市川光雄, 2001, 「森の民へのアプローチ」, 市川光雄・佐藤弘明編, 『森と人の共存世界』, 講座生態人類学 2, 京都大学学術出版会: 3-31.
 8. 市川光雄, 2003, 「環境問題に対する3つの生態学」, 池谷和信編, 『地球環境問題の人類学: 自然資源へのヒューマンインパクト』, 世界思想社: 44-64.
 9. Janowski, M., 2003, *The Forest, source of Life: The Kelabit of Sarawak*, The British Museum Occasional Paper 143, The British Museum and The Sarawak Museum.
 10. 金沢謙太郎, 2009, 「熱帯雨林のモノカルチャー: 介入するアクターと政治化した環境」, 信田敏宏・真崎克彦編, 『開発の風景: 南アジア・東南アジアの現場から』, 明石書店: 119-154.
 11. 金沢謙太郎, 2015, 「平和の森—先住民民族プナンのイニシアティブ」, 宇沢弘文・関良基編, 『社会的共通資本としての森』, 東京大学出版会: 193-212.
 12. Kanazawa, K. 2017 (in press), Sustainable Harvesting and Conservation of Agarwood: A Case Study from the Upper Baram River in Sarawak, Malaysia, *Tropics*, vol.25 no.4.
 13. Langub, J., 1984, “Tamu: Barter Trade between Penan and Their Neighbours”, *Sarawak Gazette*, Vol.55 No.1485: 11-15.
 14. Penan, 2011, *The Penan Peace Park: Penans self-determining for the benefits of all*, http://www.penanpeacepark.org/resources/2012_Penan_Peace_Park_Proposal_English.pdf
 15. Peterson, J. T., 1978, “Hunter-Gatherer/Farmer Exchange”, *American Anthropologist*, Vol.80 No.2: 335-351.
 16. Straumann, L., 2014, *Money Logging: On the Trail of the Asian Timber Mafia*, Belgri Books.
 17. Wilmsen, E. N., 1989, *Land Filled with Flies: A Political Economy of the Karahari*, University of Chicago Press.
 18. Woodburn, 1982, “Egalitarian Society”, *Man*, No.17: 431-451.

(金沢謙太郎 信州大学 総合人間科学系 全学教育機構 准教授)

(分藤大翼 信州大学 総合人間科学系 全学教育機構 准教授)

(小泉都 京都大学 総合博物館 特別研究員)

(佐久間香子 京都大学 東南アジア研究所 研究員)

2017年1月12日受理 2017年2月1日採録決定